在天会員記念礼拝説教「わたしたちを囲む証人の群れ」予稿
日本基督教団石神井教会　2023年10月22日

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙　11章32節～12章2節

１１　32これ以上、何を話そう。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダ
ビデ、サムエル、また預言者たちのことを語るなら、時間が足りないでしょう。
33信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、約束されたものを手
に入れ、獅子の口をふさぎ、34燃え盛る火を消し、剣の刃を逃れ、弱かったのに
強い者とされ、戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。35女たちは、死んだ
身内を生き返らせてもらいました。他の人たちは、更にまさったよみがえりに達
するために、釈放を拒み、拷問にかけられました。36また、他の人たちはあざけ
られ、鞭打たれ、鎖につながれ、投獄されるという目に遭いました。37彼らは石
で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放
浪し、暮らしに事欠き、苦しめられ、虐待され、38荒れ野、山、岩穴、地の割れ
目をさまよい歩きました。世は彼らにふさわしくなかったのです。39ところで、
この人たちはすべて、その信仰のゆえに神に認められながらも、約束されたもの
を手に入れませんでした。40神は、わたしたちのために、更にまさったものを計
画してくださったので、わたしたちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかっ
たのです。
１２　1こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびただしい証人の群
れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定
められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、2信仰の創始者また
完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨
て、恥をもいとわないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになった
のです。

【福音書日課】ルカによる福音書　19章11～27節

11人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話
された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れる
ものと思っていたからである。12イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、
王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。13そこで彼は、十人
の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしな
さい』と言った。14しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々
はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。15さて、彼は王の位を受けて帰
って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知
ろうとした。16最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもう
けました』と言った。17主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小

さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』18二番目の者が来て、
『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19主人は、『お前
は五つの町を治めよ』と言った。20また、ほかの者が来て言った。『御主人様、
これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。21あなたは預けな
いものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかった
のです。』22主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わた
しが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと
知っていたのか。23ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうして
おけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』24そして、そば
に立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っ
ている者に与えよ。』25僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っていま
す』と言うと、26主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更
に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。27
ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、
わたしの目の前で打ち殺せ。』」

《持っている人》として生きる【こども説教のために】

「在天会員記念礼拝」は、「天に在る人々を記念する礼拝」です。地上の生涯を終えられ、今は、天上で礼拝する者となっている人々を記念します。わたしたち地上で礼拝する者は、いずれ天上で礼拝する者とされるでしょう。それは、別の礼拝ではありません。天上の礼拝は、地上の礼拝よりもはるかに大きいのです。わたしたちの小さな地上の礼拝は、目には見えないほど大きな天上の礼拝に支えられて、どうにか為すことができているのです。

天上の礼拝に加わられている方々は、かつて地上の礼拝に加わっていたとき、「持っている者」として歩まれました。主イエスが「ムナのたとえ」でお語りくださった「ムナ」です。「信仰」と言ってもよいのかもしれません。あるいは、「神の子とされる霊」つまり「神の国の住人として生きる心」と言ってもよいのかもしれません。主イエスは、わたしたちの目に神が見えないとしても、神はわたしたち一人ひとりに「ムナ」を平等にお与えくださっている、とお教えです。その「ムナ」を用いて生きなさい、とおっしゃいます。大胆に用いてよいのです。無駄遣いかと思われる使い方でも、赦されるに違いありません。ただ、せっかくの「ムナ」を用いずにしまい込んでいたとしたら、その人は損をしているのです。「神の子」として世界を見ることも、「神の国の住人」として人と関わることも、しないことになってしまうからです。

かつて「持っている人」として生きた、今は天上の礼拝に加わられている方々を、記念します。わたしたちも、その方々の後に続くのです。

おびただしい証人の群れ

在天会員記念礼拝にお集まりの皆さんには、いつものように「名簿」をお配りしています。教会員として逝去された「在天会員」のほかに、教会員のご家族として教会が葬儀を執り行わせていただいたり、教会墓地に埋葬されている方も、この「名簿」に掲載しています。今年更新した「名簿」に掲載されている人数は、152 名です。この一年で逝去された 5 名のほか、十年前に教会が葬儀を執り行った教会員家族 1 名も、新たに加えさせていただきました。石神井教会の 65 年の歴史の中で、わたしたちの先達として歩まれた方々です。この人たちは、今は天上の礼拝に加わられて天使らと共に讃美の大合唱を歌いながら、地上を歩むわたしたちを囲むようにして、地上の礼拝を支えてくれていることでしょう。

もちろん、皆さんのご家族や周囲の方で、この「名簿」に掲載されていない逝去者もいらっしゃるはずです。他の教会で記念されている方、あるいは他宗教で記念されている方もあるでしょう。わたしたちは、そのような方々のことも、同じように記念したいのです。たとえキリスト者として歩まれた方でなくても、地上の教会の礼拝に加わることがないまま生涯を終えられた方であったとしても、わたしたちの先達であることに変わりはありません。

使徒書日課（ヘブライ人への手紙）の朗読された最初には、6 人の人々の名が記されています。いずれも、『旧約聖書』に登場するいにしえの信仰者です。この「手紙」は、ここまでに、「アダム」から始めて、『旧約聖書』に登場する代表的な信仰者の名を挙げて、その人々を記念してきたのです。けれども、ここにきて、そのような記念の記述を続けていてはきりがない、と言います。ただ名を挙げるだけ、それどころか、もはや読み手自身で想起することに任せて、いにしえの人々を記念することを終えるのです。

わたしたちの為す先達の記念も、決して閉じられることのない「名簿」によって、どこまでも広がり、続けられるものです。記念するのにふさわしい方だけを記念するのではありません。わたしたちが、すべての先達を記念することができるようになるまで、この「名簿」は閉じられることなく書き加えられ、また、「名簿」の外にある方々をも記念し続けるのです。

それは、いずれおびただしい人数になるでしょう。わたしたちの「名簿」は、まだ数え上げることができます。記念してこの方々の名をすべて読み上げても。10 分ほどでしょう。しかし、いずれ数えきれなくなるのです。数えきれない先達に囲まれるようにして、記念礼拝を営む日が来るのです。その日には、わたしたちも皆、「名簿」に掲載され、記念される者の一人ひとりとされているはずです。その日には、記念されずに取り残された者は、一人もいなくなるのです。

初めも終わりも

いにしえの日々を生きた先達を、わたしたちは、「信仰者」として記念します。敢えて申し上げれば、「信者」でなかった方も「信仰者」として記念いたします。教会で「信者」と数えるのは、「洗礼」を受けた方々です。それは、大切な「しるし」です。神のお与えくださる恵みに応える者として、主イエスと共に生きていこうとする「しるし」だからです。けれども、そうだとすると、主イエスが現れる前の時代の人々、『旧約聖書』に伝えられるような人々は、「信者」ではないということになります。「洗礼」を受けていないからです。だからと言って、その人たちが「信仰者」ではないとは言えないでしょう。むしろ、教会は、『旧約聖書』に伝えられるようないにしえの日々を生きた「信仰者」の系譜の最後に主イエスが登場された、と教えてきました。

使徒書日課の終わりには、主イエスが「**信仰の創始者また完成者である**」と言われています。その意味は、主イエスが「すべての信仰者の群れの先頭を行く者であり、またしんがりを守る者である」ということでしょう。

陸上競技の長距離走には、先頭集団を走る者もいれば、第二集団を為す者、後に続く者、そして最後尾でようやくついていく者と、いろいろな者があるでしょう。最後尾の者は、走るどころか歩くことさえままならず、いつ脱落するか分からない状態かもしれません。「信仰者」の群れにも、同じことが言えるかもしれません。主イエスは、「信仰者」の群れの先頭集団を率いる方でもあると同時に、最後尾で脱落しそうになっている者と共にいてくださる方でもある。そう言えるかもしれません。

実のところ、「信仰者」の群れに加わる人は皆、最後尾から加わるのです。その意味では、最後尾こそ「信仰の創め」であり、先頭集団は「信仰の完成」を意味していると言えるかもしれません。

主イエスは、そのような「信仰者」の群れの先頭を行く者であり、最後尾についていく者でもある、と教会は教えてきました。それは、もちろん、その間にあるすべての者でもある、ということです。「**主イエスを見つめながら**」と教会が教えるとき、それは、「いにしえから今に至るすべての『信仰者』を見つめるように」と教えているのです。そうするのが教会の続けてきた営みであり、教会は、これからもそうし続けるのです。

いにしえの日々を生きた方々を、わたしたちは、敢えて、すべて「信仰者」として記念いたします。すべての人に「一ムナ」が与えられていると「たとえ」で教えられた主イエスが、そのように記念して生きることを、お教えくださいました。そのような記念をする者の群れとして地上を歩むことの幸いを、お教えくださいました。それは、確かに幸いなことです。今の時代にこそ、わたしたちは、その幸いをすべての人にお伝えしなければなりません。